

<ワークショップ報告>

①実は初年次教育の文脈として語りたいこと

担当者：田中 岳(岡山大学), 宮浦 崇(九州工業大学), 大嶋康裕(崇城大学), 立石慎治(筑波大学)

概要：約3年という時間は思いのほか長く、2019年度までの初年次教育において何をどう実施していたのかを思い出すだけで一苦労なほどになっている。オンライン教育などのICT教育やDX化が大学で一気に進んだという見方もある一方で、そうしたコロナ禍への対応を優先する裏で実は潜在し進行したもののとして、Z世代などデジタルネイティブの学生気質の変化が挙げられる。ようやくコロナ禍以前に“戻った”と教職員は思いがちだが、学生の実態は教職員が思う以上に“先へ進んでいる”と捉え直すことで広がる理解もあるだろう。その時々における新たな学生と向き合う初年次教育は、未来の学生と大学とが出会う最初のステップであると思い起こすことが重要である。

本ワークショップは、コロナ禍が明けて新たな初年次教育を起動するためのウォームアップをねらいとした。初年次教育の文脈として語られがちな論点も踏まえつつ、この現状で、実は初年次教育と関連づけておいたほうが良いと思える新たな論点(課題)について、検討と共有を行った。例えば、新しい学習指導要領の内容や情報教育の実態など、また「接続」といったキーワードも示しながら、陥りがちな論点で見落とされるポイントに留意しながら、初年次教育のアップデートについて知恵を出し合うことに力点が置かれた。[目標]ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、それぞれ課題解決への道筋を自身の言葉で語るができるようになる。[役割]担当者は参加者間の相互作用を活性化する進行に努めますので、御参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。[過程]ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に参加者全員での共有までを計画しています。

キーワード：初年次教育, 入試・高大接続, 中等教育, ICT・DX

②2030年、2040年の初年次教育の未来構想—多様性への対応と学生中心の教育へ—

担当者：成田秀夫(山梨学院大学), 山本啓一(北陸大学), 吉村充功(日本文理大学), 菊地滋夫(明星大学), 垣花 渉(石川県立看護大学)

概要：現在の初年次教育のプログラムは多くの面で賞味期限を迎えており、改善が求められている。学生層の多様化, 学問の多様化, 教育観の変化, そして社会の多様性の増加がこの課題を浮き彫りにしている。

このワークショップでは、学生の将来意識やキャリア教育の多様化に対応し、学生中心の教育への転換を行うことを目的に、2030年、2040年といっ

た長期的な視座をもとに、初年次教育のあり方について検討を行った。
具体的には、オープンスペーステクノロジーの方式を用いて、企画者が設定した4つのアジェンダと参加者から提起されたアジェンダに分かれてディスカッションを行った。企画者からは①多様性のさらなる多様化と学生が示す初年次教育の未来、②FDのあり方、学生の学びの変化、③高大接続の多様化・地域との関係、④学生にまかせて失敗させる教育のあり方・授業の仕掛けといったアジェンダを提示した。フロアからは⑤教員のチーム化はどのように実現できるか」というアジェンダが提案された。

以上の五つのアジェンダごとに参加者によるディスカッションが行われた。①多様性については、多様化と言われながら実際には学生の多様な学修のあり方は進んでいないのではないかという問いや、多様な学生がともに学び合う「共修」という概念が提示されたほか、就職というゴールのみを強調しすぎるキャリア教育への警鐘や、探究型学習についても自己との関連性を問うことの重要性が議論された。②FDのあり方に関しては、授業改革だけでなく学修支援のあり方を考え直すFDが必要であることや、ハウツーにとどまらず教員自身の成長を支援するFDへと発展させることが議論された。③高大接続に関しては、探究活動において自律的学習者を育てることの重要性を大学と高校が共有していくことの重要性が提示された。④学生に失敗させることについては、まず教員が失敗をおそれず、学生と自然体で接しながら、フラットな関係の中で学生と対話を行うことの重要性が指摘された。⑤教員のチーム力に関しては、教員の教育観や学生観の違いを認識することや教材等を協働で作成するなかで教育観がすり合わされていくことが指摘された。失敗させる教育に関しては、学生に伴走する考え方や、教員自身の評価軸を多様化させることの重要性が指摘された。

キーワード： 共通教育と専門教育、教学マネジメント、アフター・コロナ、自律的学修者、高大接続

③演劇的手法を取り入れた初年次教育の授業設計—協同的な学びの関係性をつくるコミュニケーションデザイン—

担当者： 蓮 行(京都大学)

概要： 学習者同士の関係性を初年次の段階でつくることは、大学における4年間の学習効果を高める上で非常に重要である。本企画では、そのための手法の一つとして、「演劇的手法」を取り入れたワークショップ型の授業を紹介した。演劇的手法(ロールプレイや創作活動)を学習活動に取り入れることで、学習者がそれまでに学んできた知識や技能、育んできた価値観や考え方を、言語と身体を動員しながら表出することにつながる。また、エンターテインメント要素も大きく含まれており、楽しみながら学習を進めることができる。本企画では、担当者の設計したアイスブレイクからメインワーク(相談会のロールプレイ)までの一連の流れを実際に体験してもらうと共に、授業設計

におけるコミュニケーションデザインの考え方について解説を加えた。また、ワークショップを実施する際に利用できる教材を紹介した。参加者からは、「多様性の時代に、相手の性別や年齢で先入観を持たないことの大切さ、認知の拡大、など色々な学びを得た」、「ロールプレイを授業などで取り入れてみたいと思っていたので、まさにその例を示していただきありがたかった。ぜひ、自分でも後期の新生ゼミナールや専門の演習で取り入れてみます」などの感想が寄せられた。

キーワード： 演劇的手法, ロールプレイ, 表現活動, アクティブ・ラーニング, コミュニケーションデザイン

④アカデミック・アドバイジングを十分に活用してみませんか？

担当者： 福 博充(創価大学), 御厨まり子(明星大学), 清水栄子(追手門学院大学)

概要： アカデミック・アドバイジングは、「学生自身による将来の目的・目標の決定とその達成に向けて、担当者が途中段階のアセスメントを行いながら学生個人のニーズに沿った支援」を言う。学修者本位の教育への転換を背景として、近年日本の大学においてもアカデミック・アドバイジングの組織や制度が導入され10年が経過した。

本セッションでは、参加者間の実践と課題の共有とともに課題やニーズに合わせた柔軟なアカデミック・アドバイジングを検討することを目的とし、以下の手順で実施した。

①アカデミック・アドバイジングについて概説した後、創価大学文学部における初年次生を対象としたアカデミック・アドバイジングの機能拡充について話題提供が行われた。全学のアカデミック・アドバイジングに加え、文学部で独自のアカデミック・アドバイジングが導入された背景とともに具体的な変更点について説明が行われた。

②その後ワークシートを用いて二つの課題について、個人ワークとグループワークが実施された。一つ目のワーク課題は、所属大学または学部で実施されているアカデミック・アドバイジングの特徴や改善点・課題を書き出すことであった。参加者は個人ワークおよびグループ内共有により所属大学の実践についてふりかえりを行った。

③グループ内や全体での質疑応答を重ね、所属大学におけるアカデミック・アドバイジングの現状と課題が徐々に明確化された。さらに二つ目のワーク課題は②で取り上げた課題についての改善の検討であった。個人ワーク後にグループ内共有とあわせて意見交換が行われた。

大学におけるアカデミック・アドバイジングは各大学の状況に応じて実施されているため、“正解”があるわけではないことがこれらのワークを通じて理解いただけたと考えている。

キーワード： アカデミック・アドバイジング, 学修者本位, 協働, キャリア, 課題・ニーズ

⑤ノートの取り方をどう教えるか：モデル授業公開検討会 (2)

担当者： 藤田哲也 (法政大学), 井上晴菜 (法政大学大学院)

概要： 本ワークショップでは、担当者(藤田)が実際に法政大学で行っている初年次教育科目である「基礎ゼミ」について、実際に模擬授業を行い、授業後に参加者と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をするという、モデル授業公開検討会のシリーズの一環として開催された。今回は「ノートの取り方」の授業を行った。「ノートの取り方」は、単なるスタディスキルの一つにとどまらず、学生が「大学では自主的・自律的に学ぶ必要がある」ということを頭で理解しているだけの状態から、実際の行動に反映させるべきこととして認識を改めるための、絶好のテーマである。にもかかわらず、授業担当者からは、学生の「ノートの取り方なんて大学で教えてもらわなくても大丈夫」という主張に気圧されて、表面的・形骸的な指導を行うのみで終わってしまうと聞くことが多い。むしろ「ノートの取り方」は、学生に初年次教育全体の意義に気づいてもらえる、最重要テーマの一つであるといえる。本ワークショップでは「授業本体」を藤田が担当し、授業形態に合わせてノートの取り方を変える練習のための「授業内模擬授業」を井上が担当した。10名の参加者の皆様には、前半は学生の視点で授業を受けていただいた。後半では、指定討論者(井上)から、授業をよりよくするための議論を促す、いくつかの論点を提示した上で、それらの論点を中心に全参加者で意見交換をした。「ノートの取り方」にいかにして初年次教育の教育目標を反映させられるかについて活発に議論を行うことができた。

キーワード： アクティブラーニング, ノートテイキング, 授業検討会, メタ認知, 気づき